

Informational City: Information Technology, Economic Restructuring and the Urban-Regional Process. Blackwell. レルフ, E. 著, 高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳 (1999) : 場所の現象学. 筑摩書房. Relph, E. (1976): *Place and Placelessness*. Pion Limited.

杉山武史 (2025) :『ウルトラ・アーバニゼーションの時代—社会経済地理学の新たな挑戦—』春風社, 2025年6月刊, 348p., 4,500円 (税別)

I 本書の目的と定義

大変悩ましい表紙の書籍である。社会経済学の新たな挑戦と副題があり、同時に帯には「“倫理の地理学”が現代のアーバニゼーションに立ち向かう！」と書かれている。そこで、ウルトラ・アーバニゼーションを含め、著者の立ち位置と用語の定義を掘ることとした。

都市化を是とみる社会的背景と実態に対し、本書は過剰な都市化への継承を鳴らすものである。「過剰な都市化が『不安』なことなのだとという認識を読者と共有できれば、本書の目的が達成される」((p.9) とあるように、過剰かつ急速に世界を飲み込む都市化に対して、「不安」という観点から疑問を呈し議論を展開している。では、この「不安」とは何を指すのか。

「私たちの存在がみえなくなってしまうほどの過剰な都市化が『当たり前』になってしまふほど、危ういものはなかろう。」(p.9) と著者は述べている。さらに、「キルケゴールのいう『不安』とは、悪魔的なものと評される善に対する『不安』が内在する状況をさしており、閉ざされた『空虚』と表現されているもの（中略）すなわち、善かれと倫理的な自由を求めたにもかかわらず、逆に不自由という閉鎖的な『空虚』が生み出されてしまう矛盾である。」(p.35) 資本主義の下、大都市では都市再開発が進められジェントリフィケーションが引き起こされた。その結果として、巨大資本

による支配と交換価値の向上が目指され、商店街のような地元の生業が消滅していった。同様に、地方都市の中心商店街などでは、「まちづくり」の名のもとに地域住民自らが活動した結果、同様の矛盾した結果を得ることとなっている。都市化が過度に進むことによって、都市は空虚な空間と化しているのである。

しかし、これまで農山村振興策の多くは、農村を都市化することとほぼ同義であり、都市化のフロンティアとしてこの矛盾に直面している。そこで、本書の「不安」を読み解くキーワードに、「多自然居住地域の『フロンティア化』」(p.13) が挙げられている。「多自然地域研究との接点を考えていくにあたって大事な論点は、都市も都市化の荒波のなかで『空虚』な存在に転化してしまい、なりわいの灯火が消えそうになっている『不安』を認識することにある。」(p.12) という。よって、国土計画とそこでの多自然地域の圏域の変化、求められた地域振興の手法や目的を検討しながら、いかに都市的なやり方で多自然地域の振興が図られてきたのか、その危うさを検証している(第Ⅱ章)。

次に、「ウルトラ・アーバニゼーション」の定義をみていく。「全球的な都市化を表す言葉がプラネタリー・アーバニゼーション、アフリカのように急激な都市化がこれから起りうる状況がハイパー・アーバニゼーションであるならば、日本の都市化には『ウルトラ』という言葉を冠につけて違いを強調した方が、日本における実態を理解しやすくなる。」(p.37-38) と著者は説明している。そして、「2020年代半ばになった現代においては、『過剰』であることを認識することすら困難なほど。都市化は『当たり前』な現象になってきている」(p.9) と、善かれと思って都市化を目指す中で、自己の存在も失われているものにも無頓着になっていくことへの不安を吐露する。都市化の矛盾が都市にとどまらず、多自然地域までを

飲み込み、日本を空虚な空間に代えつつあるのである。

さらに、社会経済学と倫理の地理学との関係性についても整理しておきい。「しばしばコミュニティとその経済に『倫理』的に接近してくる、国家空間戦略という意味での領域的制度の脱構築を試みることに社会経済地理学の新たな存在意義を発見してみたい（中略）過剰な都市化からの転換に向かた『不安』の所在を明らかにするとともに、地球という惑星、日本の国土、身近に存在するコミュニティを少しでも“より良い”環境として次世代に引き継いでいく賢明な知恵を紡ぎだす挑戦、すなわち“倫理の地理学”とでも表現しうる試み」（p.16）であるといふ。つまり、社会経済地理学の視点に基づいて研究を進め、その結果倫理的な未来像を描くという大きな課題に到達しようとするものである。

本書の主張は「資本主義的経済のみ、あるいは非資本主義的経済のみで『倫理』を語ることが過剰な都市化を引き起こしてきたのではないか（中略）資本主義的経済と非資本主義的経済という二分法的な『倫理』観を克服するためには、両者を包み込みうるもう一つの倫理的な経済理論が解決の糸口となりうるのではないか」（p.34）に集約されている。

II 議論の整理と研究方法

本章では、本書の研究方法を整理したいと思う。本書は、ポール・クラヴァルによる「新しい地理学」の定義を踏襲し、社会経済地理学の視座を提示する。「クラヴァルは、社会的、経済的および文化的な側面に対して、より鮮明に焦点を合わせた見方へと現代地理学の視点が移行してきたという。すなわち、クラヴァルが現代地理学の関心として期待したのは、（1）生態学を基盤とする人間と環境の結びつきに対する見方、（2）人間相互を

結び付けるさまざまな関係、つまり距離の摩擦による関心への関心、（3）機能的分析の枠組みを超えて、景観や場所に付与されている象徴的な意味を読みとることへの持続的な関心」（p.15）である。これらのクラヴァルの視点を基礎に、考察や批評における社会経済地理学の研究視座として定義した。つまり、「①社会や文化との関係：コミュニティ、メディア、デジタルなど社会学的な考察」、「②経済との関係：資本主義的／非資本主義的の倫理を問う社会的経済の考察」、そして「③都市や農村漁村との関係：都市や多自然地域の開発・計画・政策に対する批評」（①～③はp.15より引用）である。

次に、「倫理」についての議論を整理したい。倫理的であることは善の追求を求めるものの、社会経済地理研究においては、その語り方によっては、「ウルトラ・アーバニゼーションを抑制するどころか、むしろ『るべき姿』として過剰な都市化を助長するという矛盾が生じかねない」（p.32）、いわば諸刃の剣であると指摘する。こうして、資本主義的経済が語る「倫理」こそが、都市化の矛盾の一因であると主張する。

経済的資本主義の文脈では、資本主義批判をしながらも否定しない点で倫理的である論考、連帯経済の台頭を倫理的あるいは認知的な資本主義への移行として捉える論考などが紹介された。これらの動きは、倫理を基盤に「資本主義をめぐる政治経済学的なパラダイム転換を求める声」の拡大を意味しているという。

他方、非資本主義的経済における倫理の語られ方としては、ユートピア的な「脱成長」の論理が展開されており、「非市場の財・サービス、すなわち自主精算、贈与、互酬性に基づく交換を増やすことに意味を見出そうとしている」（p.33）という。しかし、環境改善にむけた議論では、個人の行動を変えることで、環境の在り方を変えるよ

うな発想および実践が「再ローカライザーション」の文脈で生じているものの、これは同時に「地球を再び囲い込み、区切る」(p.33) 動きでもあり、矛盾をはらんでいる。さまざまな社会経済の議論において、倫理が台頭していることは自明であり、資本主義的・非資本主義的の両方において、既存の議論に対するパラダイムシフトへの期待もしくは転換点を迎えているという認識が広がっている。しかし、「ローカルな『倫理』を語ることからは、(中略) 惑星の都市化の最たる原因と思えてしまう逆説的な『虚しさ』もわいてくる。」(p.33-34)と、著者の不安の一端が語られる。

こうした中で、著者が希望を見出すのが、ギブソン＝グラハムによるコミュニティ経済論である。グラハムは、資本主義下の賃労働の他に、多様な経済の在り方が存在していることを指摘する。例えば、友人・知人とのおすそ分け、ボランティア、物々交換、生活者共同組合、非資本主義的企業、非市場向け生産など、その内実は多岐にわたる。これらの多様な経済は、善だけでなく賄賂のような悪も内包しているものの、既存の市場経済の限界を乗り越える上で、多様な経済を取り戻すことの重要性が指摘されている。グラハム自身は、「倫理的配慮を中心とした経済と表現される」(p.51) コミュニティ経済を一種の「空虚」と評している。そうだが、著者によれば、グラハムは「どこまでもコミュニティに対する希望を捨てていない。」(p.51)と評価する。グラハムが求めるコミュニティ経済とは、「話し合い、闘争、不確実性、葛藤、失望といった本来のコミュニティ経済の実践を継続的かる流動的なプロセスとして位置付けるとともに、『青写真』的な理想像の放棄を求める。」(p.52)であるという。ユートピアとしてではなく、流動的かつ継続的なコミュニティ内での実践そのものの姿を直視しようということであろう。「多様な経済という包括的な枠組みのなかで、経済をめぐ

る倫理的喚起のための対話を促すプロジェクト実践にギブソン＝グラハムによるコミュニティ経済論の特徴がある。」(p.52) という。コミュニティ論を重視する著者の立場も含め、ようやく本書の立ち位置が理解できた。表紙の困惑が解けたところで、以下では、本書の構成や評価に駒を進めたいと思う。

III 構成・各章の目的と成果

本章では、本書の構成と各章の目的を整理する。本書はⅢ部、5章構成であり、序章に続き、以下のように議論が展開する。

第1章では、都市化に関わる「倫理」の語られ方を「不安」の所在とした議論が展開する。

続く2章は、第三次国土形成計画により提唱された多自然居住地域の議論について、「地方圏の農山漁村の経済的・生活的なシステムが都市化の波に『解放』される契機になってしまった」という危惧に基づき、国土計画の変遷と兵庫県の事例を踏まえて議論する。第3章は、2022年閣議決定した「基本計画」および「総合戦略」によって誕生したデジタル田園都市国家構想について、国家の肝入事業であるにも関わらず平穏に受け入れられ、あまり疑問をテする論者がいないことに対し、著者は「不安」を感じている。政策の整理と鎌倉の事例を通じて、この不安に向き合っている。

さらに、4章では、「この60年にわたる巨大資本と投機的開発が繰り返されてきた顛末において、私達の身近な街々は、近隣に住まう人たちによって培われてきたコミュニティのための経済という自由闊達な精神的支柱を喪失してしまったのではないだろうか」(p.220)との不安から始まる。その要因として、著者が着目するのはまちづくりの二分化である。「一方は、大都市圏内に位置するローカルな街をめぐって、中心市街地とその近隣の関係性を講じるコミュニティ的な視覚」(p.220)

であり、「他方は、2000年代以降の『都市再生』事業や大規模再開発プロジェクトという街づくりから変質した『まちづくり』が論じられたものである。」(p.221)。

最終章では、「創造都市論」が政策立案の道具と化し、世界中の都市景観を変質させてきたことへの警鐘である。これらに3つのコラムが挿入され、本章の「不安」が丁寧に議論されている。

IV 評価

20世紀は、先進諸国の都市化が顕著であり、その後の成熟期・衰退期を議論する動きが顕著となっている。移民の影響の少ない日本では、少子高齢化、未婚化などが進み、東京などの大都市圏中心部を除けば、他地域より一層衰退の色が濃いといえる。後進国とされた地域ではメガシティが出現し、アマゾンは開拓され、北極や南極の氷河さえも溶け出す時代である。プラネタリー・アーバニズムに代表されるような世界規模で都市が地表を覆いつくす現象には、様々な懸念があり、著者はこの点に敏感に反応している。都市・農村の二分法に拘泥せず、その両方に取り組んだ点は大変興味深く、多自然居住地域をめぐる論考は秀逸であった。他方、事例研究の部分では、フィールドワークを主とする評者からすると表面的に過ぎるように思われた。また、コミュニティの概念は、再検討すべき時期に来ているとも感じた。地表面に縛られた空間的範囲、もしくはサーバー空間上であれ、人々が集う場所をコミュニティと呼ぶとすると、グラハムのいう「多様な経済」はもっと幅広い紐帶の定義でこそ意味をもつようになるのだ。コミュニティとは何か、再度投げかけたい。

(久保倫子)